

白居易詠病詩の考察

— 詩人と題材を結ぶもの —

埋 田 重 夫

〔一〕

極言すれば、人は誰でも、死という最終到達点に向かつて生きていけると言える。それは決して目標ではありえないが、しかしあらゆる生命體の最終歸着點が、結局のところ死であるとの事實は否定すべくもない。この點で、死を意味する「歸天」「歸土」「歸世」「歸古」などの現代中國語表現は、有限なるものとしての人間の一過性・運命性を示唆していて興味ぶかい。そうした(誕生) → (成長) → (衰老) → (死) という人生のうちで、詩人における死生觀・疾病觀の表出は、身體の衰退期である老年に到って、一層著しいものがある。少なくとも、白居易の文學を傳記に照らして考えた場合、この傾向はほとんど決定的である。

詩人は例外なく誰でも、對象を凝視するものであるが、自分が思つたさまざまな「疾病」を、數十年にわたって熟視し續けたという點で、白居易は極めて特異な存在である。本稿では主として身體論的側面から、題材詩としてのいわゆる「詠病詩」に焦點をあてて、彼の文學の一端を考えてみたいと思う。彼はいつでもどこでも自己の病氣を詠っている。しかもその詠法・作風は年齢とともに變化し、複数の疾病を體驗すること獲得する思想・哲學も、より深くより堅固なものとしているように觀察される。結論的に言えば、一連の白居易詠病詩への考察・分析は、單なる健康論・養生論などの範圍を超えて、その文學の特質——白の個性——にまで迫りうる有効な方法論の一つであると考えられる。「白居易はなぜ詠病詩を多作したのか」との問題は、何よりもまず「疾病」

という題材の特殊性ゆえに、おのずから興味ぶかい観点を包含している。①彼にとって病とは結局のところ何だったのか、②彼にあって病を詩に詠うことは最終的に何を意味していたのか、という課題は、白居易なる作家像を追究・解明しようとするものにとって、やはり避けることのできないものである。具體的作品の分析・統合を通して、この題材詩のもつ諸相について考察を加えていきたい。

〔二〕

中國文學——特に古典韻文——における各種題材詩の系譜は、悼亡詩・臨終詩、招隱詩・遊仙詩、詠懷詩・諷諫詩、詠史詩・覽古詩などの名稱に示されるごとく、それぞれに長い歴史と傳統をもっている。しかし詩題と詩内容から、純粹に自分の病を詠うと判断される作品は、唐代に白居易という詠病詩多作詩人が出現するまでは、それほど量産されるものはなかったようである。唐以前にあっては、劉楨・謝靈運・鮑照のように、部分的な素材として自己の病に言及する例は認められるものの、本格的な詠病詩をまとまった作品群として遺しているものは、ほとんど指摘できない。我々の日常生活に根ざした「疾病」という題材が、ある種のエネルギーを

もって詠われるようになるのは、いわゆる中唐詩の世界においてであり、文學の生産者と享受者の大多数が、貴族によって占められていた六朝時代ではない。以下、この時期の詠病詩を時代順に詩題で提示する。⁽⁴⁾

- (1) 漢代 (a) 樂府古辭「婦病行」、⁽⁵⁾「漢詩」卷九
- (2) 齊代 (a) 謝朓「在郡臥病呈沈尚書」、「齊詩」卷三、三、(b) 同前「移病還園示親屬詩」、「齊詩」卷三、(c) 同前「和王長史臥病詩」、「齊詩」卷四、(d) 王秀之「臥疾敍意詩」、「齊詩」卷六
- (3) 梁代 (a) 江淹「臥疾怨別劉長史詩」、「梁詩」卷三、(b) 劉孝綽「秋雨臥疾詩」、「梁詩」卷十六、(c) 梁簡文帝蕭綱「喜疾瘳詩」、「梁詩」卷二十一、(d) 同前「臥疾詩」、「梁詩」卷二十一、(e) 朱超「歲晚沈痾詩」、「梁詩」卷二十七
- (4) 北周代 (a) 釋亡名「五苦詩(其三) 病苦」、「北周詩」卷六
- (5) 隋代 (a) 王冑「臥疾閩越述淨名意詩」、「隋詩」卷五

謝朓は三首と最も多いが、そのうちの一首は、他者の詠病詩に對する“和韻”であり、嚴密に言えば、梁の簡文帝二首と並んでいると考えられる。題材詩としての詠病詩は、六朝後期になって次第に制作されるようになるわけであるが、全體として十二首と寡作であり、しかも白居易詠病詩にしばしば見られる“連作詩”や“特定の病を詠った詩”などの特色ある作品は、全く認められない。またそうした作品裏に説理性を付與させようとの性格は、白居易に到って一層顯著になるものであるが、唐以前の詠病詩からは、これら“病氣哲學”⁽⁶⁾とも言うべき「理」(三)の表出・表明は見出し難い状況にあると判断される。

詠病詩の系譜という意味で、最も注意されるべきは、中唐文學を代表する白居易にはかならない。彼は十代後半から七十代前半にかけて、七十六首もの詠病詩を創作し、絶えず自己の病に對峙し續けた詩人である。少なくとも彼にとつて病を詠うこと——病そのものではない——は、その精神を減退させるものではなかつたようである。そうした客觀的事實は、作品の多作をもつて知られる杜甫(約二五〇首)や李白(約一〇〇〇首)の詠病詩が、それぞれ五首・一首に過ぎないとの點に極めて端的に現れている。この種の題材詩は“詠

物”を含めたその他多數の題材詩に比較して、詩人自身の關心の強弱・多少が、より明確に反映されるように思われる。身體の負的狀態である病氣を自ら積極的に詠うという營爲は、おそらく本質的な部分で、白居易の人間像(個體・個性)に直結していると推測されよう。花を詠う詩にも、彼のその時々感慨が色濃く映されているが、病を詠う詩は、特にその老年期の死生觀を理解するうえで、重要な視點を提供しているようである。

ところで白居易詠病詩の獨自性は、七十六首の詩數・面よりもむしろその内容・面から強調されねばならない。白居易文學における詠病詩の不可缺性は、例えば“疾病”の類目を設ける各種詩選集に、彼の詩が多數採録されている事實によつても證明されるだろう。元代、方回撰評、李慶甲集評校點『瀛奎律髓彙評』(上海古籍出版社、一九八六年四月)(卷四十四、疾病類)の十首、明代、張之象撰『唐詩類苑』(卷一三〇、人部、疾病)の五十二首、清代、載明說等編『唐詩類苑選』(内閣文庫本)(卷二十一、人部、疾病)の五首は、いずれも白居易詠病詩の代表作であるばかりでなく、唐代詠病詩の系譜にあって、重要な位置を占めるものと思われる。⁽¹⁰⁾白居易を含めた唐代詩人の入選詩數を參考までに引用する。

- ㉑ 『唐詩類苑』の場合——〔①白居易^{*}(52首)、②元稹(16首)、③皮日休(10首)、④陸龜蒙(10首)、⑤盧綸(8首)、⑥韋應物(6首)、⑦孟郊(6首)、⑧錢起(5首)、⑨李端(5首)、⑩杜甫(5首)、⑪呂溫(5首)、⑫韓愈(4首)、⑬張籍(4首)、⑭王建(4首)、⑮許渾(4首)、⑯孟浩然(3首)、⑰包佶(3首)、⑱王維(3首)、⑲李商隱(3首)〕
- ㉒ 『唐詩類苑選』の場合——〔①皮日休(6首)、②白居易(5首)、③盧綸(3首)、④陸龜蒙(3首)、⑤許渾(2首)、⑥杜甫(2首)〕

兩詩選集の“疾病”部に採録されているもの多くは、白居易・元稹・皮日休・陸龜蒙・盧綸らに示されるように、中唐から晩唐にかけて活躍した詩人たちであり、この題材詩の制作ピークが、いわゆる唐代後半であることを如實に物語っている。とりわけ白居易の詠病詩が、どの選集にも高い比率で入選していることは、この分野・領域における彼の獨自性を暗示する結果ともなっている。こうした「作詩數」と「評定度」の緊密なパラレル關係は、相對的に他の詩人にその傾向が認め難いことより、白居易文學の注意すべき標徴の一つ

白居易詠病詩の考察(埋田)

であると言えよう。『詠物詩選集』“疾病”部にみられる偏差は、そのまま白居易文學の核心をも指し示していると考えてよい。

およそ時間というものが、個々の具體的經驗を通して認識・知覺されるのであるならば、身體の異常體驗である病こそは、白居易をして生命・時間・人生という問題を眞劍に見つめ直す大きな契機になったと考えられる。

〔三〕

白居易は、代宗の大曆七(七二二)年に鄭州新鄭縣東郭宅に生まれ、武宗の會昌六(八四六)年に洛陽履道里宅で没した。

その七十五年にわたる生涯のなかで、彼が抱いたさまざまな感情(喜怒哀樂)や理念(思想・哲學)は九九パーセントの保存率を誇る『白氏文集』のうちに、そのまま開陳されている。その文學に認められる最大の特色は、徹底した日常性への密着である。閑適詩に示される日常生活の描寫、白話系語彙・語法の多用に示される言語感覺は、この點を最もよく裏づける。彼にとって特殊な題材、特異な語彙は、持續的な情熱と關心をもたせるものではなかったようである。白居易詩に近親者⁽¹⁾・友人・自己の病がしばしば詠われるのも、基本的

にはそれが、人間の日常生活と深く關係している事象であるからにはほかならない。

彼はその時々、自らが患っている病を實に詳しく記述する。『白氏文集』の讀者は、いわゆる詠病詩の多きに平行して、その他の題材詩のなかに、おびただしい病の記事があることに気がつくであろう。それらの敘述の多くは、どれも傳記と微妙な關係を有しており、白居易の深く重い感情を映し出している。本節では主として身體論的觀點から、これらの資料を年次にそくして再整理し、白居易の病歴について概観しておきたい。¹³⁾ 彼がいつ頃から、どのような病を患ったのかという問題は、白居易詠病詩を本格的に論ずるための導入・序説として、やはり必要なことと判断されるからである。

白居易が病に言及する詩歌作品は、全體として膨大な數にのぼるが、それらを注意深く検討し、年齢順に再編成すると、彼の病歴・病期が、ある種の因果關係をもつて精確に浮かびあがってくる。『白氏文集』七十一卷を對象にした調査については、以下の結果を得ている（初出の病名については*印を付し、當該詩の詩題を全て提示する）。

① 30歳から39歳までの期間（校書郎・盤屋縣尉・集賢校

理・翰林學士・左拾遺・京兆府戶曹參軍時代）へ○31歳
 へ眼病〔秋思〕〔0752〕、○39歳へ病氣休暇。

② 40歳から49歳までの期間（左贊善大夫・江州司馬・忠州刺史・司門員外郎・主客郎中知制誥時代）へ○40歳へ眼病、齒が一本抜ける〔自覺二首、其一〕〔0483〕、○41歳へ眼病、○43歳へ眼病、風痰〔病中早春〕〔0829〕、○44歳へ風痰、眼病、○45歳から46歳へ眼病、○46歳から47歳へ眼病、齒髮の衰え、肺疾患〔閑居〕〔0326〕、〔薄陽歲晚、寄元八郎中、庾三十三員外〕〔1010〕、○49歳へ眼病。

③ 50歳から59歳までの期間（朝散大夫・上柱國・中書舍人・杭州刺史・太子賓客分司東都・河南尹時代）へ○50歳へ刑部侍郎・太子賓客分司東都・河南尹時代）へ○50歳へ眼病、○51歳へ齒の衰え、眼病、肺疾患、○52歳へ眼病、病氣退職の決意を述べる、○53歳へ眼病、風痰（氣嗽）○54歳へ病氣休暇、○55歳へ眼病、肺疾患、痰氣（嗽聲）、頭風〔九日寄微之〕〔2484〕、落馬による腰痛〔馬墜強出、贈同座〕〔2459〕、〔酬別周從事二首、其一〕〔2490〕、○57歳へ眼病、肺疾患、病氣休暇、○58歳から59歳へ齒髮の衰え、眼病、肺疾患。

④ 60歳から69歳までの期間（河南尹・太子賓客分司東

- 部・太子少傅分司東都時代)へ○60歳〜眼病、頭風、宿醉(洛橋寒食日作十韻〔2683〕)、○61歳〜頭風、齒髮の衰え、宿醉、病氣休暇、○62歳〜頭風、病眼、宿醉、○63歳〜眼病、瘡疔を病む(二月一日作、贈韋七庶子〔3015〕)、○64歳〜同州刺史就任を病のため辭退、聽力障害の兆候(「短歌行」〔2992〕)、○65歳〜頭風、齒痛(「病中贈南鄰覓酒」〔3279〕)、眼病、○66歳〜齒が二本抜ける、聽力障害、○68歳〜風痺(「病中詩十五首、其一、其二、其三」〔3408〕〔3409〕〔3410〕)、○69歳〜頭風、風痺(手のマヒ)、眼病、聽力障害、齒の缺損、足疾(「足疾」〔3457〕)。
- ⑤ 70歳から75歳までの期間(太子少傅分司東都・刑部尙書時代)へ○70歳〜頭風、病氣のため退官、○71歳〜風痺、頭風、眼病、足疾、聽力障害、○73歳から75歳〜眼病、肺疾患、聽力障害)。

白居易が七十五年の間に體驗した病は、重度のものから軽度のものまで、また慢性のものから急性のものまで、實に多種多様であり、しかも呼吸器・循環器・視聽覺器官など、身體のあらゆる部位に及んでいることが理解されよう。傳記面から考えると、彼が病を多發させた時期は、四十歳以後の下

白居易詠病詩の考察(埤田)

邦服喪期と外任退居期であり、とりわけ江州司馬・杭州刺史・蘇州刺史などの地方官吏職にあった頃に集中している點が興味ぶかい。六十歳以降、洛陽に退居してから病氣がちであったことは、高齢ゆえの身體の衰弱を想起すれば、當然のことであろう。しかし四十歳から六十歳までの二十年間に、これだけ多くの病を患っていることは、注意されねばならない。結論から言えば、典型的な北方育ちである彼の體質にとつて、江南地方の氣候・風土は、概して好ましい影響を與えなかつたと考えられる。江州・杭州・蘇州のいずれの地においても、白居易がとりわけ呼吸器系疾患に悩まされた事實は、こうした推測を客觀性をもって傍證するものである。外任のなかでも特に寶曆一年五月から寶曆二年十月までの蘇州期は、呼吸器障害・打撲痛・眼病などの疾患を連續して——あるいは重複して——經驗しており、これら一連の病が、彼の精神にかなり深刻な影を落としたであろうことは想像に難くない。蘇州刺史時代に作られた詩篇に佳作が少ないのも、基本的にはこの事情に原因するのかも知れない。白居易は生涯中、病氣による免職を五度あじわっているが、蘇州刺史職はその最も早い先例となつた。

白居易の主要な疾病は、眼病・肺病・風痺(中風)の三つに

大別される。そのうち肺病は、直接要因としての飲酒習慣と間接要因としての赴任地の氣候のために生じたものであった。¹⁸⁾ 咳や痰、のどの渴きなどの症状は、彼を十分に憂鬱にさせたと思われるが、しかし白居易文學を病狀と病期という二面から考えた場合、より注意すべきは、眼病と風痺の二つに絞られてこよう。前者は數十年に及ぶ持續的な病として特別な意味を持つのに對して、後者は六十八歳の冬十月に突然おそった急病として特殊な意味を持つ。白居易詠病詩を考察する時、この二種類の疾病を全く無視することはほとんど不可能に近い。彼の眼病については、①近視・亂視・遠視などの視力障害（いわゆる飛蚊症・眼花・花生眼¹⁹⁾）であつたこと、②具體的症狀の自覺は、既に二十代後半から三十代前半にかけて始まり、この病症は七十四歳の最晩年までほぼ一貫して續いた¹⁹⁾ということ、③病因は「與元九書」〔1486〕に述べられるごとく、科擧及第のための過度な受験勉強にあつたと考えられること、④視力障害は、彼の一生を通して、頭風（頭痛）を誘發させる主要因ともなつたこと、の四點にほぼ整理できるようである。一方、その風痺は、⑤飲酒習慣、⑥衰老、⑦寒冷の季節（冬）、という三つの惡條件が重なることによつて發病したものであり、酒をこよなく愛した白居易には、宿命

の病であつたと言えよう。この二種類の異質な疾病が、彼の精神——あるいは文學——にさまざまな影響を與えたことは、全白居易詠病詩中、眼病と風痺についてのみ「連作詩」が制作された事情からも窺い知ることができる。なかでも風痺は、「病中詩十五首」〔3408～3422〕の長篇連作詩に示されるように、白居易文學にとつて重要な意味をもつものであつたと考えられる。

彼にとつて「病」とは、自分という人間（肉體プラス精神）の本質を改めて問ひなおす「時」と「場」を提供するものであつたようである。およそ人の個性は、身體が「正」「實」から「負」「虚」に移行した病態にこそ、よりよく顯在化するのかも知れない。少なくとも白居易は、その種の人間であつたと言つてよいであらう。以下、その詠病詩を中心にして、さらに詳しくみていきたい。

〔四〕

白居易詠病詩七十六首は、その内容からみると、⑧自己の病を詠うケース、⑨他者の病を詠うケース、の二種類にほつきりと分けることができる。⑩に屬するものは、「酬楊九弘貞長安病中見寄」〔0203〕「酬張太祝晚秋臥病見寄」〔0418〕

「聞微、江陵臥病、以大通中散、碧腴垂雲膏寄之、因題四韻」
 「0730」「夢得臥病、攜酒相尋、先以此寄」〔3338〕の四首で、い
 ずれも親友の病を見舞ういわゆる友情の詩である。これに對
 して④群の作品七十二首は、純粹に自分自身の病を題材化し
 たもので、さらに下位分類として、①特定の病を詠じたもの、
 ②不特定の病を詠じたもの、の二つに區分される。本節
 では、特に④群に屬する詠病詩七十二首を對象にして、従前
 の白居易研究ではほとんど取り扱われなかったこの題材詩の
 成長發展、作風の變化特色について考えてみようと思う。

「蒲柳質」のことばに象徴される白居易の病弱體質は、遺
 傳的な要素に加えて、幼年期の貧しい生活からくる榮養不足
 が原因の一つになっていると考えられる。加えて青年時代の
 猛烈な受験勉強は、眼病をはじめさまざまな疾病・ストレス
 をもたらしたようである。十八歳の時に作られた「病中作」
 「0673」は、白居易詠病詩の最も初期の作品に位置づけられる
 が、そこには多感な青年の複雑な思いが詠い込められている。

病中作〔0673〕 病中の作

久爲勞生事 久しく勞生の事を爲し

不學攝生道 攝生の道を學ばず

白居易詠病詩の考察(埋田)

少年已多病 少年にして已に多病
 此身豈堪老 此の身 豈に老に堪へんや

生活の苦勞に追われて、自身の健康管理にまで配慮が及ば
 ないと述べる前半二句は、この當時の白家の家庭事情をも暗
 示していて留意されよう。貧しい生活、内亂による一家離
 散、病弱な自分、將來への不安など、あらゆる不安因子が既
 にこの詩には表出されている。

前半生における白居易詠病詩の作風の變化について考えて
 みると、母陳氏の喪に服して下邳渭村に退居した四十歳以後
 の作品が特に注意されねばならない。「新樂府五十首」〔0125〕
 「0174」や「秦中吟十首」〔0075〕〔0084〕などの「諷諭詩」によって、
 國政の弊害・矛盾を糾弾していた三十代は、「病假中南亭閑
 望」〔0184〕「寒食臥病」〔0678〕などの注目すべき作品があるも
 のの、それ以外の大部分は、他者の病をテーマにするもので
 ある。下邳で作られた詠病詩は、全部で十二首指摘すること
 ができる。最初にそれら全作品を詩題によって提示する。

(1) 「首夏病間」〔0238〕、(2) 「病中哭金鑾子」〔0776〕、(3) 「病
 氣」〔0778〕、(4) 「寄同病者」〔0249〕、(5) (7) 「村居臥病三首、其

- 一、其二、其三」〔0476〕〔0477〕〔0478〕、(8)「病中友人相訪」〔0482〕、
 (9)「眼暗」〔0780〕、(10)「病中作」〔0782〕、(11)「病中得樊大書」
 〔0786〕、(12)「得錢舍人書問眼疾」〔0797〕

母の「丁憂」による三年半の服喪期に、連続して十二首も
 の詠病詩が作られ、しかもその作品は個々に大きな特色をも
 っている。短期間の詠病詩多作という現象は、おそらく白居
 易四十歳の元和六年が、彼にとつて幸福な年ではなかったこ
 とと深い関係があるろう。母の死に續いて、この年の冬、彼は
 病中であつて最愛の一人娘を失っている。

病中哭金鑾子〔0776〕

豈料吾方病	飄悲汝不全
臥驚從枕上	扶哭就燈前
有女誠爲累	無兒豈免怜
病來纔十日	養得已三年
慈淚隨聲迸	悲腸遇物牽
故衣猶架上	殘藥尙頭邊
送出深村巷	看封小墓田
莫言三里地	此別是終天

病の自分が、幼い我が娘の臨終・埋葬に立ち會うという異
 様な詩内容からして、三十代までの作品とは全く隔絶した詠
 病詩となっている。白居易は一生の間に祖母・父・母・兄・
 弟・娘・息子・婿・親友・知人など、数えきれない人々の死
 を経験してきているが、三歳にして夭折した金鑾の死は、父
 親としての悲哀をまざまざと痛感させるものであつた。

下邳期の詠病詩の特異性は、「病中哭金鑾子」〔0776〕にもは
 っきりと現れているが、その最大の特色は、相對的に以下に
 擧げる三點に歸納できるようである。その第一は、「眼暗」
 〔0780〕「得錢舍人書問眼疾」〔0797〕のように、不特定の病一般
 ではなく特定の病(眼疾)に絞つて詠うという姿勢である。眼
 の疾患を題材として扱ふものには、他にも蘇州期の「眼病二
 首」〔247〕〔248〕「病眼花」〔287〕があるが、下邳期のそれは最
 も早い作例として指摘されよう。そして第二に注意すべき點
 は、下邳で初めて詠病詩の連作が試みられた事實である。白
 居易詠病詩における連作詩は、六十八歳最晩年の「病中詩十
 五首」〔340〕〔342〕によつて一應の完成をみるわけであるが、
 「村居臥病三首」〔0476〕〔0477〕〔0478〕は、それら作品群の起點に
 位置し、重要な意味をもっている。三番目に言及されるべき
 は、説理性の問題である。一般に白居易には、詩的言語によ

って「理ⁱⁱ」を「説^{shu}」く傾向が認められるが、こうした現象は、彼の詠病詩という分野にあって一層顯著になっている。哲學をもつ詩人という表現が許容されるならば、まさしく白居易は、その典型的な詩人であったと判断してよいであろう。七言絶句「病氣」〔0778〕は、これら説理性の表白によって一首全體が貫かれており、四十代の彼の疾病観を理解するうえで無視できない詩篇となっている。

病氣〔0778〕

病氣（氣を病む）

自知氣發每因情[◎]

自ら知る 氣の發するは毎に情に因る
を

情在何由氣得平[◎]

情在らば何に由りてか氣平らかなるを
得ん

若問病根深與淺

若し病根の深きと淺きとを問はば

此身應與病齊生[◎]

此の身は應に病と生を齊しくすべし

不變たり得ない「情」によって「氣」が支配されるならば、

「氣」もまた可變ならざるを得ない。そうしてみると、我々の肉體である「身」は、直接に「情」と「氣」の影響を受けずにはいられない。「情」「氣」「身」という三つの相關性を

前提にすれば、「氣」を「病」むことによって生じる種々の病状は、白居易にとって絶対不可避なるものであったと思われる。後年の詠病詩に多々みられる「理」の開陳は、早くもこの七絶詩のなかにはつきりと認められる。

母の死、娘の死、片田舎での憂鬱な服喪生活、多病な自分など、下邳での特殊な生活環境は、結果として白居易に詠病詩を多作させ、その詩風・詠法に著しい變化を與えたと断定してよいであろう。自己の病氣を客觀視する詩人の眼は、この數年の間に、より強固に確立されたと考えられる。

白居易前半生における詠病詩のピークを、下邳期と定めるならば、後半生におけるそれは、洛陽に隱退していた六十八歳前後であると思われる。下邳以後、詠病詩は外任の江州（二首）・杭州（五首）・蘇州（三首）を含めて、ほとんど途絶することなく作られているが、作品量と内容性から、六十八歳に作られた風痺を詠う「病中詩十五首」〔3408〕〔3422〕の存在は、極めて大きいと言わざるを得ない。この連作十五首は、

①白居易詠病詩としては初めて一五七文字からなる序文を併せもつ點、②連作詩のうちに更に「病中五絶五首」〔3411〕〔3415〕の小連作詩を含む點、③十五首がそれぞれ七絶（十一首）・七言六句（一首）・五律（一首）・七律（一首）・七排（一首）といっ

た多様な詩型によって構成されている點、などからみてもかなり特色ある作品となっている。しかしここで注目したいのは、それら様式面の特徴以上に、理によって情を詠う説理的抒情性である。説理性の付與は、下邳以後の白居易詠病詩に次第に認められるものであるが、「病中詩十五首」はそうした説理的性格を最も濃厚に有する點で注意されねばならない。とりわけ、

六十八衰翁 乘衰百疾攻
朽株難免蠹 空穴易來風 (其一、初病風)〔3408〕

甘從此後支離臥 賴是從前爛熳遊 ……
若問樂天憂病否 樂天知命了無憂 (其二、枕上作)〔3409〕

世間生老病相隨 此事心中久自知
今日行年將七十、猶須慙愧病來遲
(其四、病中五絶、其二)〔3411〕

方寸成灰鬢作絲 假如強健亦何爲
家無憂累身無事 正是安閑好病時

(其五、病中五絶、其二)〔3412〕

目昏思寢即安眠 足軟妨行便坐禪
身作醫王心是藥 不勞和扁到門前

(其七、病中五絶、其四)〔3414〕

歲暮矐然一老夫 十分流輩九分無
莫慙身病人扶持 猶勝無身可遣扶 (其十四)〔3421〕

などの詩句からは、原來苦痛・苦惱の對象でしかない病を、視野の轉換——達觀——によって肯定的に把握しようとの思考が明確に感知される。與えられた條件・状況のなかで、いかに自分自身を失わずに生きるか、という自己管理の法が、これら一連の詠病詩には、極めて集約的に詠い込められていると言えよう。「知足安分」(zhīzú ānfēn)「樂天知命」(lètiān zhīmìng)の思想は、主として精神面で、風痺の後遺症に悩む白居易の大きな支えになったと考えられる。下邳服喪期と洛陽退居期の詠病詩を隔つ決定的ポイントは、これら説理性(説理的抒情性)の多寡・強弱にあると考えてよい。白居易詠病詩に限って言えば、疾病をめぐる哲學的議論は、老年期に

到るほど著しいものがある。

以上、本節では白居易詠病詩の作風の變化・變質を二期に分けて考察してきた。その結果、この題材詩が彼の人生にいかに関係するものであったかが明示できたと思う。詠病詩が多作された第一の要因は、文字通り、白居易が終生多病であった事實に相違ない。しかしここでより重要なことは、自己の病を詩作の對象にする作家の意識であろう。白居易は、持續的なエネルギーをもって、自分を取り巻く日常生活を詠い續けた詩人である。日常性の詩化は、彼の文學を特徴づける最大の要素であるが、同時にまたそれは、詩作の日常化をも意味していたと判断される。極言すれば、白居易にとって詩作行爲は、その日その日の哀歡を記録する不可缺の生活日記的要素が強かったと考えられる。三千首に達する多量な作品の集積、それらの制作年次の考證が比較的容易なこと、の二點は、生活日誌としての性格を強く主張するものである。白居易が詠病詩を量産した最大の理由は、その文學全體に認められる「詩作の日常化」「日常性の詩化」という特色にこそ求められるべきであろう。人間の日常生活にとって、およそ病ほど身近なものはないからである。疾病によってもたらされる孤獨・憂鬱・苦惱・苦痛といったマイナス方向の感情を、

白居易詠病詩の考察(埋田)

白居易は詩作によって軽減していたと言つてよいであろう。白居易詠病詩に表出される「理」(條理)は、それら負的感情を鎮靜化させるために援用されているようである。

〔五〕

幼少の頃より病弱であった白居易は、結果として七十五歳の長壽を得た。虚弱體質の彼が、多年にわたつて複数の病に苦しみながらも、これだけの長命を獲得したのは、どういふ意味をもつのであろうか。本節では、最後にこの問題について考察を加え、幾つかの私見を述べてみたい。

病氣に對する白居易の對策は、服藥・點藥・散藥・安眠・食事療法・散策・齋戒・坐禪など多岐にわたる。本草學についての知識も深かつたらしく、『白氏文集』には、具體的な漢方藥の名が散見される。行動としての對策は、このように廣範圍に及んでいるが、藥との關連で注意されるのは、彼の酒に對する認識であろう。「郡齋暇日、辱常州陳郎中使君早春晚坐水西館書事詩十六韻見寄、亦以十六韻酬之」(0362)「哀病無趣、因吟所懷」(0576)「夜聞賈常州、崔湖州茶山境會、想羨歡宴、因寄此詩」(2460)「酬夢得見喜疾瘳」(3426)「病後寒食」(3439)などでは、いわゆる藥用酒について述べられてお

り、白居易と酒との關係を考えるうえで興味ぶかい。酒一般への言及は、病を題材にした白居易詠病詩にあつても、實に頻繁に認められる。

病中贈南鄰覓酒〔3279〕 病中 南鄰に贈りて酒を覓む

頭痛牙疼三日臥

頭痛み牙疼きて三日臥す

妻看煎藥婢來扶

妻は煎藥を看 婢は來り扶く

今朝似校抬頭語

今朝校や頭を抬げて語るに似たり

先問南鄰有酒無

先づ問ふ南鄰 酒有りや無やと

病中・病後の白居易にとって、飲酒の行爲は、必ずしもマインナスにのみ作用するものではなかつたようである。彼が酒を愛した背景には、單純な陶醉・歡樂という側面のほかに、養生（體力増進）・遣興（ストレス發散）という積極的な部分があつたことを忘れてはならない。もちろん衰病のために酒が飲めないことを詠う作品は、多數存在する。また痛飲が己れの身體を損つたとの自覺もはっきり認められる。しかし軽度の病状で、かつ氣がむけば、彼はいつでも酒を傾けたようである。この傾向は、六十八歳で風痺の病に倒れてからも、ほとんど變わることがなかつた。

これら行動としての疾病對策は、それぞれに有效な結果をもたらしたであろうが、考察のより中心に置かれるべきは、前節でも一部引用した説理系詠病詩の存在である。眼前の病に對して精神的にどう對處していくかという問題は、若い時から多病であつた白居易には、やはり深刻な課題であつたと思われる。以下引用する四首には、白居易の疾病觀・健康觀が直接的に詠出されており、説理（談理）詩としても興味ぶかい内容となつてゐる。

①「四十未爲老、憂傷早衰惡。前歲二毛生、今年一齒落。

形骸日損耗、心事同蕭索。夜寢與朝殮、其間味亦薄。同

歲崔舍人、容光方灼灼。始知年與貌、衰盛隨憂樂。畏老

老轉迫、憂病病彌縛。不畏復不憂、是除老病藥。」（自覺

二首、其一）〔0483〕

②「自學坐禪休服藥、從他時復病沈沈。此身不要全強健、

強健多生人我心。」〔罷藥〕〔0870〕

③「臥在漳濱滿十旬、起爲商皓伴三人。從今且莫嫌身病、

不病何由索得身。」〔病免後、喜除貧客〕〔2718〕

④「榮枯憂喜與彭殤、都似人間戲一場。虫臂鼠肝猶不恠、

雞膚鶴髮復何傷。昨因風發甘長往、今遇陽和又小康。還

似、遠行裝束了、遲迴且住亦何妨。」〔老病相仍、以詩自解〕
〔340〕

①②は本稿で規定したいいわゆる狹義の詠病詩ではないが、作品の主題(テーマ)は、病そのものを一貫して扱っており、説理系詠病詩の代表作と考えてよいであろう。これら四首に共通する視點は、人にとって衰老が避けられないものであるように、病氣もまた必然であるとする認識である。⁽²⁴⁾衰老疾病が不可避であるとの觀點に據れば、それを畏れ哀しみ嘆く必要もなくなるし、また絶えず完全なる健康體を保持する必然性もなくなる。つまり、病氣も日常的な變化の一つに過ぎないとの達觀によって、病氣を多元的・肯定的に捉えなおす餘裕が生じてくる。①②③④以外にも白居易詠病詩には、病を苦惱・孤獨といった一面でのみ捉えるのではなく、その境遇にむしろ安んじることで別の視野を開拓するとの論理がしばしば認められる。現象を一元からのみ把握しないという白居易の複眼的思考は、結果として強力な復原力を生み出し、彼の精神——あるいは肉體まで——にプラス方向のベクトルを與えたと思われる。病という負的環境にあって、白居易の自己管理能力の高さには、眼をみはるものがある。病をてなす

白居易詠病詩の考察(埋田)

け我がものとする精神的達觀が、行動としての療法以上に、白居易の身體に上向き力を與えたことは、おそらく否定できないであろう。自己の病に對する詩人の對應はさまざまであるが、これらの點で白居易は、杜甫などのタイプの詩人と極めて對照的であると言えよう。白居易が病弱ながらも、七十五歳の天壽を全うできたのは、これらの意味からも、單なる偶然と言うべきではない。

〔六〕

本稿では、題材詩としての白居易詠病詩を對象にして、その文學の特色について考察を加えてきた。それら論點の中心は、なぜ白居易は病を好んで題材・素材にしたのかという部分にあった。各節で確認できた事項をそれぞれ要約して示せば、以下のようになる。

①題材詩としての詠病詩が、詩人個人にあって本格的に多作され始めるのは、いわゆる中唐以後であり、漢魏六朝・隋・初唐・盛唐の各時代では、それほど量産されるものではなかったということ。

②唐代詩人中、詠病詩を最も多く創作したのは白居易であ

り、それら作品群は、後代の『詠物詩選集』の編者たちにとつても、ほとんど無視できないほどの量的質的意味をもつていたということ。

③白居易個人における疾病は多種多様であるが、そのなかでも慢性(持續性)の眼病、急性(突發性)の風痺は、彼の人生觀・死生觀・健康觀・疾病觀に大きな影響を與えたと考えられる。病期という點で言えば、服喪期(四十歳〜四十三歳)、外任期(四十四歳〜五十五歳)、退居期(六十二歳以降)の三つの時期が特に注意されるということ。

④白居易がこれだけ多數の詠病詩を制作した要因は、彼自身病弱であつたという事實のほか、その文學に顯著な生活、日誌的、性格を指摘しなければならぬ。つまり白居易文學に強く認められる「詩作の日常化」「日常性の詩化」という要素は、我々の日常生活とやはり不可分な疾病という題材に對して、極めて有機的に作用していると判斷されること。

⑤白居易詩の大きな特色の一つである説理・談理という傾向は、その詠病詩の分野において、一層色濃く反映されている。それら説理系詠病詩では、疾病という負的環境でいかにして精神の安定・充足をはかるかとの問題がし

ばしば議論されるが、そうした「理」の開陳は、結果として白居易に、強力な精神的肉體的復原力を與えていると考えられること。

白居易は詩中に病を語ることで、彼の苦惱・不安・悲哀・孤獨などの感情を軽減し克服しようとしているように觀察される。少なくとも白居易にとつて、自己の病を凝視し詠うことは、その精神を滅入らせるものではなく、反對に強力な復原力を與えたようである。詩を作る行爲が、その詩人の人生——生きること——そのものと直結しているとすれば、白居易はまさしくそうしたタイプの詩人であつた。發散(自己充足)としての詩作は、その生活、日誌的、特質(「詩作の日常化」プラス「日常性の詩化」とも呼應して、これだけ多數の詠病詩を生み出したと考えられる。盛唐の大詩人である李白が、詠病詩をほとんど作っていないのは、彼における詩作のあり方が、本質的な部分で白居易と大きく異なっていたからにはかならない。白居易は詩作の營みのなかで、その時々、自分が抱えた深刻な問題を解決してきた人のようである。「詩魔」ということは、白居易と詩歌との因果を最も象徴的に示すものとして興味ぶかい。白居易という詩人と詠病と

いう題材、詩との緊密な相関性は、その文學を精確に理解するうえで、とりわけ重要な示唆を含んでいると判断されよう。

〔註〕

- (1) 中國文學以外の領域で身體論を扱ったものでは、總論としての①『精神としての身體』(市川浩、勁草書房、一九八六年二月)、②『身體』(湯淺泰雄、創文社、一九八六年六月)、③『思考のレクチュール1、身體という謎』(小作修平、作品社、一九八六年九月)、比喩論としての④『隱喩としての病い』(スーザン・ソンタグ、みすず書房、一九八二年四月)、作品論としての⑤『日本近代文學の起源』(IV、病という意味)(柄谷行人、講談社、一九八一年二月)などが指摘できる。

(2) 本稿では、詩題に「病」「疾」などの語をもち、一首全體が病氣を主題にしているものを、狹義の詠病詩と規定する。その他、病を素材として部分的に敘述する作品は、廣義の詠病詩と考え、補助資料として使用する。

- (3) ①劉楨(贈五官中郎將詩四首、其二) ↓遂欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』(中華書局、一九八三年九月)所收「魏詩」卷三、②謝靈運(齋中讀書詩) ↓同前書「宋詩」卷二、「命學士講書詩」 ↓同前書「宋詩」卷二、「初至都詩」 ↓同前書「宋詩」卷三、③鮑照(松柏篇) ↓同前書「宋詩」卷七) など。

白居易詠病詩の考察(埋田)

(4) 各詩題・詩文の引用は、注(3)所掲書に據る。

(5) 「婦病連年累歲、傳呼丈人前一言。當言未及得言、不知淚下一何翩翩。屬累君兩三孤子、莫我兒飢且寒、有過愼莫宜答。行當折搖、思復念之。亂曰、抱時無衣、襦復無裏。閉門塞牖、舍孤兒到市。道逢親交、泣坐不能起。從乞求與孤買餌、對交啼泣、淚不可止。我欲不傷悲不能已。探懷中錢持授交、入門見孤兒、啼索其母抱。徘徊空舍中、行復爾耳。棄置勿復道。」

(6) 例えば『杜詩詳註』(中華書局、一九七九年十月)には、「送孔巢父謝病歸游江東兼呈李白」(卷一)、「病後過王倚飲贈歌」(卷三)、「老病」(卷十五)、「耳聾」(卷二十)、「江閣臥病走筆寄呈崔盧兩侍御」(卷二十二)の五首があり、また王琦注『李太白全集』には、「淮南臥病書懷、寄蜀中趙徵君蕤」(卷十三)の一首がある。題材——素材ではない——としての詠病詩は、唐詩を代表する杜甫・李白にとっても、それほど大きな比重をもつものではなかったと考えられる。

(7) 白居易のいわゆる詠花詩については、小稿「白居易詠花詩論序説——江州司馬以前を中心にして——」(『文學研究科紀要 別冊第十集』文學・藝術學編、早稲田大學大学院文學研究科、一九八三年二月)、「白居易詠花詩論考——江州司馬以後を中心にして——」(『文學研究科紀要 別冊第十一集』文學・藝術學編、早稲田大學大学院文學研究科、一九八四年二

月)を参照されたい。

- (8) 五言では「病中詩十五首、其一、初病風」〔340〕、「病入新正」〔3435〕、「臥疾來早晚」〔3436〕、「病瘡」〔3618〕、「馬隆強出贈同座」〔2459〕の五首、七言では「春盡日宴罷感事獨吟」〔3446〕、「改業」〔3473〕、「眼病二首、其一其二」〔2477〕〔2478〕、「病眼花」〔2871〕の五首を、それぞれ採録している。ちなみに本稿で引用する白居易詩文は、全て四部叢刊本『白氏文集』(那波本)に依據し、作品番號は花房英樹『白氏文集の批判的研究』(朋友書店、一九七四年七月)所收のものを用いる。
- (9) 「臥疾來早晚」〔3436〕、「村居臥病三首、其一」〔0476〕、「病中詩十五首、其九、送嵩客」〔3416〕、「病中詩十五首、其十二、別柳枝」〔3419〕、「病起」〔1036〕。
- (10) 念のために言えば、三種の『詠物詩選集』「疾病」部に採録される詩篇には、詩題に疾病などの語を含まないいわゆる廣義の詠病詩(注(2)参照)がかなり存在する。これは各撰者における概念規定のズレに依るものであるが、その點を考慮しても、白居易詠病詩の數的質的優位性は動かないであろう。他の詩人との差異が決定的であるからである。
- (11) 白居易の妻(楊氏)も病弱であったことは、「獨對多病妻、不能理針線。」〔秋霖〕〔0452〕「萊妻臥病月明時、不擣寒衣空擣藥。」〔秋晚〕〔0956〕「貧友遠勞君寄附、病妻親爲我裁縫。」〔元九以綠絲布、白輕衫見寄、製成衣服、以詩報知〕〔1011〕
- (12) 個々の作品成立年次の考證については、花房英樹『白氏文集の批判的研究』「繫年表」(前掲)、王拾遺『白居易生活系年』(寧夏人民出版社、一九八一年六月)、朱金城『白居易年譜』(上海古籍出版社、一九八二年六月)を参照。
- (13) 白居易の病歴——文學そのものではない——については、今井清『白樂天の健康狀態』(『東方學報』三十六、京都大學、一九六四年十月)に詳しい調査がなされており、本稿第三節との關連で参考になる。
- (14) 三十代後半から本格的に生じた白髮は、白居易にとって身體の衰老を痛烈に自覺させるものであった。彼は終生、異常なほど白髮に言及するが、四十歳に下邳で作られた「白髮」〔0424〕は、その死生觀を詠うものとして注意される。「白髮知時節、暗與我有期。今朝日陽裏、梳落數莖絲。家人不慣見、憫默爲我悲。我云何足怪、此意爾不知。凡人年三十、外壯中已衰。但思寢食味、已減二十時。況我今四十、本來形貌羸。書魔昏兩眼、酒病沉四肢。親愛日零落、在者仍別離。身心久如此、白髮生已遲。由來生老死、三病長相隨。除却無生念、人間無藥治。」
- (15) 「城頭傳鼓角、燈下整衣冠。夜鏡藏鬢白、秋泉漱齒寒。欲將閑送老、須著病辭官。更待年終後、支持歸臥看。」〔祭社宵〕〔2328〕。

(16) 「同州慵不去、此意復誰知。誠愛俸錢厚、其如身力衰。可憐病判案、何似醉吟詩。勞逸懸相遠、行藏決不疑。徒煩人勸課、只合自尋思。白髮來無限、青山去有期。野心唯怕鬧、家口莫愁飢。賣却新昌宅、聊充送老資。」〔詔授同州刺史、病不赴任、因詠所懷〕(322)。

(17) 白居易詩「醉中得上都親友書、以予停俸多時、憂問貧乏、偶乘酒興、詠而報之」(3587)には「頭白醉昏昏、狂歌秋復春。一生耽酒客、五度棄官人。……」と詠われている。また當該詩の自注(『南宋紹興本』卷三六所收)には「蘇州、刑部侍郎、河南尹、同州刺史、太子少傅、皆以病免也」とある。

(18) 白氏の肺病については、前掲今井論文が説くように、重病の肺結核ではなく、気管支炎(気管支カタル)程度のものであったと考えてよい。①七十五歳の長壽を得たこと、②終生一度も咯血していないこと、の二點はこの指摘を傍證しよう。

(19) 「……僕始生六七月時、乳母抱弄於書屏下、有指無字之字示僕者、僕雖口未能言、心已默識、後有問此二字者、雖百十其試、而指之不差。則僕宿習之緣、已在文字中矣。及五六歲、便學爲詩。九歲、諳識聲韻。十五六、始知有進士、苦節讀書。二十已來、晝課賦、夜課書、間又課詩、不遑寢息矣。以至于口舌成瘡、手肘成胝、既壯而膚革不豐盈、未老而齒髮早衰白、髻髻然如飛蠅垂珠在眸子中也、動以萬數。蓋以苦學

白居易詠病詩の考察(埋田)

力文所致、又自悲矣。……」。

(20) 「我貌不自識、李放寫我真。靜觀神與骨、合是山中人。蒲柳質易朽、麋鹿心難馴。何事赤墀上、五年爲侍臣。況多剛狷性、難與世同塵。不惟非貴相、但恐生禍因。宜當早罷去、收取雲泉身。」〔自題寫真〕(0229)。

(21) 「村居臥病三首」(0476)、「眼病二首」(2477)、「病中詩十五首」(3408)、「3422」、「五年秋、病後獨宿香山寺三絕句」(3466)。

(22) この點の詳細については、松浦友久「白居易における陶淵明(上)(下)」——詩的說理性の繼承を中心に——(『中國詩文論叢』第五集・第六集、中國詩文研究會、一九八六年六月、一九八七年六月)を参照されたい。

(23) 例えば風痺に倒れた六十八歳に作られた「病中詩十五首、其十三、就媛偶酌、戲諸詩酒舊侶」(3420)では「伍屏軟褥臥藤牀、昇向前軒就日陽。一足任他爲外物、三盃自要沃中腸。頭風若見詩應愈、齒折仍誇笑不妨。細酌徐吟猶得在、舊遊未必便相忘」と詠われている。白居易と酒の關係は、疾病という観点からみると、微妙で複雑な問題を含んでいる。

(24) 白居易のこうした認識は、彼が「病」に言及する場合、その多くが「老」との對偶・對語表現によって語られる傾向にあることにも、はっきり現れている。